

農業王国・十勝の第一歩を築いた先駆者

依田 勉三

依田勉三は、一八五三年、伊豆国（現在の静岡県）の裕福な農家の三男として生まれました。

幼い頃から塾で漢学と農業を習い、東京で外国人に教えるを受け、さらに福沢諭吉の影響を受けましたが、病気のため、ふるさともどり、教師として働いていました。



〔帯広百年記念館蔵〕

そんな勉三の人生を大きく変えたのは、開拓使顧問ホールズ・ケプロンが書いた北海道の視察報告書でした。そこには北海道の広大さや開拓の可能性について書かれていました。勉三はその内容におどろき、北海道へ移住したいという願いをもつようになりました。

その後、二十八歳の時に、開拓の下調べのため北海道に渡りました。自分の目で、北海道がケプロンの報告書の通りであることを確認した勉三は、ふるさとに戻り、自らが

発起人となり、東京で勉学中に知り合った友人の渡辺勝、鈴木銃太郎とともに、北海道開拓を目的とした会社「晩成社」を設立しました。そして、ついに、一八八三年、勉三は、開拓予定地を下帯広（現在の帯広市東部）に決定し、十三戸二十七名の移民を連れ、十勝を目指して出発しました。下帯広に着いた勉三たちは、先住のアイヌ民族の住居に住まわせてもらいながら、開拓小屋を建て、ハルニレやナラの大木をたおし、生いしげる草をかって、原野の開拓に着手しました。土地はとても肥えていて、土を耕し種をまくと、まもなく芽を出しました。生活は厳しいものでしたが、豊かな実りを期待しながら、勉三は、その日にあった出来事や開拓の進み具合を日記にくわしく書き記していきました。



〔勉三の日記〕

〔帯広百年記念館蔵〕

しかし、順調に育っているかのように思われた作物は、悪天候により発育が止まったり、バッタの大群にやられたりしてしまうなどして、開拓一年目は、満足な収穫を得ることができませんでした。また、不満をもった仲間がぬけていき、ますます状況は厳しくなりました。

とうとう一つぶの米もなくなったある日、勉三と晩成社の仲間が、豚のえさとしてホツチャレとジャガイモを煮ていた鍋をつつきながら、

開墾の 始めは豚と 一つ鍋

と、うたつたという話が残っています。初めは、どんな困難な状況においても、北海道の開拓をつらぬくという強い意志をもち続けたいと考えていたのです。

その後、勉三は、帯広の開拓を続けながら、開拓の資金とするために、大樹町で四十頭の牛を飼い、牧場を開きました。

一方、勉三の設立した晩成社は、豆、小麦、ビート、トウモロコシ、ばれいしよなどの栽培に加えて、牛肉、乳製品の製造、木材工場や稲作を始めました。また、函館に牛肉店を開いたり、東京に向けてバターを送ったりと、十勝で製造したものを遠くの商業地まで運び、販売することを考えていました。しかし、これらの先進的な事業は、会社の赤字をふくらませ、最終的には農地を手放す結果につながりました。



〔晩成社の製造したバターのラベル〕
〔帯広百年記念館蔵〕

一九二五年、勉三は七十三歳で「晩成社には、もうほとんど何も残っておらん。しかし、十勝野は：」

という言葉を残し、その生涯を帯広で終えました。

晩成社と勉三の歩みは失敗の連続でしたが、開拓にかけた勉三の不屈の精神と晩成社の試みは確実に受けつがれ、後に続く人々の目標となり、現在の農業王国十勝が築き上げられたのです。

一八五三	伊豆国（現在の静岡県）で生まれる
一八八二	晩成社を設立する（二十九歳）
一八八三	十勝・下帯広に移住する（三十歳）
一八八六	大樹町に移り、牧場を開く（三十四歳）
一九〇九	幕別村（現在の幕別町）途別に水田をつくり、成功する（五十七歳）
一九二五	帯広で死去する（七十三歳）
一九三二	晩成社が解散する

*ホツチャレ：産卵後に打ち上げられた鮭